

抵抗するアラスカ先住民文学

——ヴェルマ・ウォーリス『ふたりの老女』をめぐって——

馬 場 聡

はじめに

アラスカ先住民作家ヴェルマ・ウォーリス (Velma Wallis, 1960-) の『ふたりの老女』 (*Two Old Women: An Alaska Legend of Betrayal, Courage and Survival*, 1993) は、合衆国はもとより、日本やヨーロッパ諸国を含む17ヶ国で翻訳出版され世界的なベストセラーとなった。無名の先住民作家のデビュー作という意味においても、またアラスカの辺境を拠点とする作家という意味においても、この作品の世界的な流通は大方の予想を覆すものだった。本作品はアサバスカ語族の一集団であるグウィッチンの人々 (Gwich' in People) に伝わる口承伝承をもとにしている。作品のプロットはシンプルで、食糧難にあえぐ集団がやむなく二人の老女を厳寒の山中に置き去りにする、いわばアラスカ版「姥捨て山」物語である。出版当時の書評筋は概ね、人類が共有できる「普遍的な」道徳譚、教訓譚として位置づけてきた。たしかに『ふたりの老女』はその主題を見る限りにおいては、非政治的な作品といえる。しかし、作品が執筆された当時の合衆国の社会、そして、グウィッチンの人々を取り巻いていた状況を考慮に入れるならば、本作品が主題とする「姥捨て」は興味深い政治性を帯びてくる。本稿では二つの解釈共同体を前景化することで浮かび上がる対照的な作品の解釈と受容の諸相を検証する。さらにウォーリスのライフ・ライティングを参照しながら、本作品を読み直すことで、アラスカ先住民の口承民話に潜在する対抗する物語性について検討したい。

1. 「棄老」とエイジズム

周知のとおり、本作が主題とする「棄老」を扱った物語は洋の東西を問わず、世界各地に散在する。日本においても古くは『今昔物語』や『大和物語』、20世紀には柳田国夫の『遠野物語』（1910年）、深沢七郎の『楢山節考』（1956年）など「姥捨て」をモチーフにした物語は枚挙に暇がない。しかし、本稿で論じる『ふたりの老女』は、高齢者が飢餓に苦しむ共同体を救うために、黙して死を受け入れるという棄老物語の典型的な筋書きとはいささか趣を異にする。寒さの厳しいある年の冬、食料難におちいった集団の酋長が、口減らしのために二人の老女を山に置き去りにする決断をくだすことで物語は始まる。80歳のチディギヤーク (Ch'idzigiyaak) と75歳のサ (Sa') が、集団から捨てられた時の反応を見てみたい。

“But we will die if we just sit here and wait. This would prove them right about our helplessness.” Ch'dzigiyaak listened with despair. Knowing that her friend was dangerously close to accepting a fate of death from cold and hunger, Sa' spoke more urgently. “Yes, in their own way they have condemned us to die! They think that we are too old and useless. They forget that we, too, have earned the right to live! So I say if we are going to die, my friend, let us die trying, not sitting.” (15–16)

サは、集団に置き去りにされたことを死刑宣告ととらえるが、ただ死を待つのではなく、できる限りのことをしようという決意表明を行う。引用部にみられるように、酋長による姥捨ての決定に対して、老女が批判的な立場をとり、死を受け入れるのではなく生き延びようとする姿勢によって、この作品は単なる姥捨て物語から「生き延びること」についての物語としての性格をあらわにする。当然のこと極北の厳しい自然条件の下で生きる集団にとって、生き延びることは最優先の課題とされる。酋長が下した「姥捨て」の決断が集団内で一定の承認を得たことから、集団が生き延びることが、あらゆる物事の公正さの基準になっていることが伺える。

本作品において集団から切り捨てられる対象となるのは「高齢者」であ

り、かつ「女性」であるという点は興味深い。つまり、高齢者の切り捨ては、いわゆる「姥捨て」であって、男性高齢者がその憂き目にあうことはない。作品中の男性高齢者ダーグー (Daagoo) の集団内での位置づけと老女たちのそれとを比較すると、この作品における「棄老」とジェンダーの位相が明確になる。

Among The People was a guide named Daagoo. He was an old man, younger than the two old women, but still considered an elder. In his younger days, Daagoo had been a tracker, but the years had dimmed his vision and skills. He observed out loud what none of the others would acknowledge. "Maybe they moved on," he said in a low voice so that only the chief would hear him. (96)

ダーグーは、二人の老女よりは若い、目は弱り狩の技術も衰えているにも関わらず、集団内では年長者として敬われ、酋長からの一定の信頼をも保っている。同じ老人であっても、男性は敬われ、女性は集団から排除されるという構図は、集団内部のジェンダー・ロールに起因するようだ。

The women did most of the burdensome tasks such as pulling the well-packed toboggans. In addition, much other time-consuming work was expected to be done by the women while the men concentrated on hunting so that the band could survive. No one complained, for that was the way things were and always had been. (9)

引用部から明らかなように、集団内では難儀で、手間隙のかかる仕事は女性が引き受け、男性は狩りに専念することになっている。さらに注目すべきことは、このふたりの老女が、集団の女性たちの担うジェンダー・ロールから完全に逸脱していることである。老女のひとり、サは子供の頃から女性に課された役割を担うことを嫌い、男たちと共に狩りや魚釣りに出かけることを好んでいた。結果として女性に与えられた仕事を引き受けず、男性の役割である狩や漁に明け暮れるサは、集団内で異端視されていく。他方、チディギヤークの場合は、長きにわたって結婚して妻の役割を担う

ことに関心を示さず、最終的に年老いた男性と結婚することを強いられる。社会学者アードマン・B・パルモア (Erdman B. Palmore) は「エイジズムとセクシズムが結びつくことによって、女性高齢者の問題が深刻になっている」(11) ことを強調し、エイジズムとセクシズムの共犯関係を「二重の危険」(11) と指摘する。この作品における性別による棄老の峻別は、エイジズムとセクシズムとの絡み合いの中でなされたものと考えられる。

物語は、捨てられた二人の老女が高齢者ゆえの老獪な知恵をもとに生き延び、最終的には集団と和解することで結末を迎える。看過できないのは、集団とふたり老女をめぐるヘゲモニーの変化である。老女たちは女性であり、高齢者であるという理由から集団の中で周縁化され、姥捨ての憂き目にあった。しかし、遺棄された厳寒の山中で豊富な知恵と経験を活かして大量の食糧確保に成功する。

The women told the chief what they expected from The People. He responded by telling them their wishes would be obeyed. “We will give you enough food for The People, and when it becomes low, we will give you more food. We will give you small portions at a time,” Sa’ told the chief, who nodded his head almost humbly. (125)

老女たちが、いまだ窮乏状態にある集団との再会を果たした際に食糧を分け与えることで、老女たちと集団の酋長の権力関係は反転する。アメリカ文学における高齢者表象を分析するバーバラ・ワックスマン (Barbara Waxman) は、この作品におけるチディギヤークとサのサバイバルを経た、集団に対する貢献を「支配的な文化のエイジズムに対する積極的な抵抗」(129) とみなし、本作品をアンチ・エイジズムの作品と位置付ける。ワシントン・ポストの書評において、ジョン・ミューレイ (John Murray) は、この作品が多くの人々に受け入れられた要因の一つとして、高齢化するアメリカ社会を挙げている。アラスカ先住民に伝わる棄老伝説のノベライゼーションが、想像をはるかに超える読者を獲得した背景には、当時の合衆国における高齢者を巡る特殊な状況があった。

1992年3月26日の『ニューヨーク・タイムズ』の一面には、「老いて、病んで、最後にお荷物は捨てられた」というセンセーショナルな見出しの記事が掲載された。この記事が報じたのは、まさに現代版「棄老」事件だった。オレゴン州の老人介護施設に入所していた84歳の老人が実の娘にホームから連れ出され、遠く離れたアイダホ州のカーレース場に、車いすのまま放置されたのだ。この記事が報じるところによると、1年間に、少なくとも7万人の高齢者が家族によって遺棄されたという。この事件に象徴されるように、新自由主義体制の元、レーガン政権が福祉制度への大幅な歳出削減を行ったのを皮切りに、以後、アメリカの高齢者福祉制度は脆弱化していく。期せずして、「姥捨て」を意味する造語“granny dumping”がメディアに頻出するようになったのもこの時期である。高齢者に対する公的支援の弱体化に端を発する「棄老」事件が可視化されるようになった時期に、本作品がポピュラリティを獲得することになったことには、単なる偶然以上のものがある。これまでアメリカ社会が直面してきたレイシズム、セクシズムという問題に加え、高齢化社会の到来によって顕在化するエイジズムは、新たな差別の構図として知られるところとなる。このような合衆国における高齢者問題の只中におかれた解釈共同体においては、極北の民に古くから伝わる姥捨て物語が、アンチ・エイジズムという視座から読まれる可能性が開かれる。

2. エネルギー資源開発と先住民コミュニティ

『ふたりの老女』はその主題に関する限りにおいては、非政治的な作品であり、たとえば、他の民族との人種的対立を描いた第二作目の『鳥娘の話』(*Bird Girl and the Man Who Followed the Sun*, 1996)とは明らかな対照を成している。それゆえに、出版当初の書評筋は一様に、「高齢者の豊かな知恵に学ぶ」という道徳的、かつ教訓的な読みを読者に提示している。興味深いことに、本作品が出版された時期のグウィッチンの人々は、差し迫る政治的な圧力の下に置かれていた。この節では『ふたりの老女』をグローバ

ルな力学のもとで立ち上がったエネルギー資源開発をめぐる論争という文脈と対照し、グウィッチンの人々を中心とする解釈共同体について検証することで、この作品に潜在する政治性、あるいは、政治的な読解の可能性を明らかにしたい。

集団からうち捨てられたふたりの老女の物語は、作品の創作から出版に至る時期に合衆国本土とグウィッチン社会との間で繰り返された、北極圏国立野生生物保護区 (The Arctic National Wildlife Refuge, ANWR) の開発をめぐる論争に共振する。ANWR は、アラスカ州の北部を石油および天然ガス開発の拠点にしようと画策する政治家や、エネルギー資源に関心を示す企業とのせめぎあいの中で 1960 年に成立した。以来、開発推進派と環境保護派のロビイストたちの論戦が、当該地域に対するホワイトハウスの政策を左右してきたことは広く知られている。1988 年にアラスカ州政府と石油会社は ANWR の開発計画を発表するが、1989 年のエクソン・バルディーズ号の石油流出事故によって「最後のフロンティア」の危機が大々的に報道された結果、この計画は一時的に凍結された。この事故を扱ったメディアの報道合戦の経緯についてはアラスカ文学研究者スーザン・コリン (Susan Kollin) が精緻な分析を行っている。コリンは事故後の過剰に不安を募らせる報道のレトリックに着目して「単に自然についての懸念だけではなく、むしろ重要なことは、合衆国のナショナル・アイデンティティーを危惧する警鐘を映し出している」(5) と述べ、自然破壊への懸念と今なおフロンティアを志向する国民の心性とを切り結ぶ。この事故への反応に見るように、アラスカの開発をめぐる論争は、概ねエネルギー資源確保を安全保障上の課題と考える開発推進論と、原生自然が残る合衆国最後のフロンティアを保全しようという環境保護論との対立が根底にある。もちろん、グウィッチンの人々にとって、ANWR における石油採掘計画は、到底受け入れられるものではなかった。彼らの生活は狩猟採集を基盤としており、カリブーをはじめとする ANWR 内の野生動物は、食糧源であると同時に、衣服や住まいの材料であり、集団の存続にとって不可欠だったか

らだ。調査によって、油田開発がポーキュパイン・カリブー群の繁殖地に壊滅的な打撃を与えることが明らかにされると反対運動は激化した。グウィッチンの人々にとっては、開発推進か環境保護かという問題というよりもむしろ、集団の伝統的な生活や文化、あるいは集団の存続にかかわる重要な問題だったのだ。先住民文学研究者ジェニー・バブ（Genie Babb）は、作品のプロットと ANWR の開発をめぐる論争との間に平行な関係がみられることを指摘している。

There are a number of obvious parallels between the plot of *Two Old Women* and the present ANWR controversy: in the story, the tribe is threatened by scarcity of physical resources; in the present-day situation, the Gwich'in are threatened by potential scarcity of physical resources (caribou) . In the story, the ostensible reason The People are faced with scarcity is that the winter is particularly harsh In the present-day situation, the loss of the caribou would result in a similar weakening of cultural values that revolve around the subsistence lifestyle. (Babb 314)

『ふたりの老女』では厳冬のさなか食糧源の確保に窮した集団の危機が要因となり高齢者の切り捨てへとつながった。さらに ANWR の開発によっても、同じく食糧源であるカリブーが減少することで、自給自足に基づく集団の生活と文化は失われる。バブはこのような両者の平行な関係にこの作品の現在性を見出している。作品のプロットと ANWR におけるエネルギー資源開発との類推は興味深いのだが、ウォーリスがこのような同時代的な状況に対するコミットメントとして作品執筆したかどうかを知るすべはない。しかし、この作品がグウィッチン社会に受け入れられた経緯を前景化することで、本書と開発との意外な関係性が浮かび上がる。

『ふたりの老女』のあとがきでは、グウィッチン・コミュニティ内部から、ウォーリスがこの作品を出版することについて、多数の批判的な意見が出されたことが明かされている。アラスカ州の主要紙、アンカレッジ・デイリー・ニュース（*The Anchorage Daily News*）で特集されたグウィッチ

ン・コミュニティ内部からの批判について検討してみたい。

I did raise that question and thought it might be controversial,” says Mayo. “Because it depicts a very unsavory situation, and I’m not sure that the Gwich’in people would appreciate that depiction. . . . I may have told them that it was not a good idea to publish it.” . . . There is always an undercurrent of suspicion, says Peter, that whites will take over and profit from what belongs to Natives. (McDaniel J1)

グウィッチン・コミュニティ内部から寄せられた批判は、大きく2つに区分される。第一に「姥捨て」という非人道的で不条理な主題が、グウィッチンの人々に負のイメージを植えつけることになるという懸念から生じた出版に対する否定的な意見である。先住民社会と主流社会との微妙なバランスの上で生きることを余儀なくされた人々から、この種の不安が生じることは想像に難くない。第二に、古くから口承で集団に伝えられてきた物語を出版し流通させることが、白人社会による「グウィッチン文化の搾取」につながるという批判である。詳細については次節で述べるが、他の北米先住民の経験の例にもれず、グウィッチンの人々は白人による抑圧と搾取の対象であり続けてきた。周知のとおり、合衆国本土に比べアラスカの実質的な植民化の歴史は浅いため、白人入植者との接触の記憶が鮮明に残っていることもあり、白人社会に対する警戒心は依然として強いとされる。グウィッチンの人々にとって、長きにわたって口承で伝えられてきた口承民話を土台にしたウォーリスの作品を出版することは、まさにエスニシティの商品化に他ならならず、これを白人による民族文化の搾取とする批判的な見方が生じるのも当然のことと思われる。『ふたりの老女』の編集者であるラエル・モーガン (Lael Morgan) は「編集者あとがき」において、コミュニティ内部からの批判について次のように述べている。

“It makes Athabaskan people look bad,” one Native leader told me flatly. “If you publish it, you will make Athabaskan people look bad.” The project languished. I explained the situation to Wallis, and she under-

stood. She'd had the same reaction from some Athabaskans in Fort Yukon. "Sometimes I feel like Solomon Rushdie — decidedly unpopular," she said. (*Two Old Women* 143)

本作品が1993年にフェアバンクス地方出版社エピセンター・プレス (Epicenter Press) から出版にこぎつけたあとも、グウィッチンの人々からの批判は続いた。状況が一変するのは、翌年に大手出版社ハーバー・コリンズから再出版され、その後、各国で翻訳され世界的なベストセラーとなったからである。時を同じくして、1995年にANWRが再びエネルギー資源開発を目論む人々の標的になると、グウィッチンの指導者たちは一転して『ふたりの老女』に対して積極的な支持の姿勢を見せ始める。レイチェル・ラムジー (Rachel Ramsey) はこの転向に関して、次のような見解を示す。

Suddenly, Gwich'in leaders have cashed in on the wide appeal of Wallis's book to publicize its "allegorical nature." They are no longer worried about its "taboo" topics, but see instead its value as an allegory of "living off the land" and of "taking care of our environment." Though one would not criticize the motives behind such an appropriation, it does signify that Wallis, as a possible subversive element, has been contained, and her work aligned with the goal of the Gwich'in people. (Ramsey 39)

ラムジーが述べるように、合衆国のみならず、世界的なパブリシティを獲得した本作品はグウィッチンの指導者たちによって、ワシントン主導のANWR開発に対するネガティブ・キャンペーンに寄与するテキストとして、戦略的に読み替えられていくことになる。このように、概ね先住民に伝わる普遍的な道徳譚として読まれてきた『ふたりの老女』は、グウィッチンの人々を中心にする解釈共同体においては、エネルギー資源開発に抵抗するテキストとなる。

1990年代初頭の湾岸戦争は、中東地域への石油依存を減らし、エネルギー資源の国内自給率を高める必要性を合衆国に知らしめる結果となった。

その結果、1995年に共和党は上下両院で過半数の議席を獲得した後に、ANWR内での石油採掘を容認する条項を含む予算案を可決する。議会とホワイトハウス、そしてアメリカ国内はもとより、世界各国の石油企業主導で進められた石油採掘推進に対して、組織的に異議を申し立てるためにグウィッチン運営委員会 (Gwich'in Steering Committee) が発足する。この組織はグウィッチンの各集団の総意として油田開発に対する反対運動を展開し、さらに、合衆国内の他の先住民組織、また隣国カナダをはじめとする、国境を越えた連帯に抵抗の可能性を模索していく。文化人類学者である井上敏明は、この反対運動を「グローバリゼーションが進行している現在、その裏をかくかたちで、先住民社会という非西洋的な社会による国境をまたいだ運動によって、一国家の問題だったはずの油田開発が、まさにグローバルな問題に読み直されている」(120) との見解を示している。抵抗運動が草の根的かつトランスナショナルな連帯に向かうなかで、ウォーリスの作品がグウィッチンの人々を中心とする解釈共同体において、ANWR内で自然資源に依拠して生きる人々の姿を外部に広く伝える手段として読み替えられることになったのだ。このようにエネルギー資源開発と環境正義をめぐる文脈にこの作品をおくならば、「姥捨て」という弱者排除の主題に、エネルギー政策下で切り捨てられるグウィッチンの姿を重ね合わせる読解の道が開ける。

3. サバイバンスの物語学

『ふたりの老女』において、集団の酋長が下した「姥捨て」という不条理な決断に一定の公正さを与えるものがあるとすれば、それは、極限状況下では、「集団の大多数を救うためならば、足手まといになる弱者の切捨てはやむをえない」という論理である。事実、この決断についての酋長の葛藤が詳細に描写されており、酋長はさほど大きな倫理的な負債を負ってはいない。また、二人の老女たちが集団に依存し、ことあるごとに不平不満を漏らすというように、老女側にも集団から排除される要因があったことを

示唆するくだりがある。物語の結末部では、老女たち自身が、集団に対する甘えや依存を反省し、最終的には、再び集団に包摂されたあとも、集団に依存するのではなく自立した生活を送ることになる。つまり、この作品は年老いたヒロインたちの生き延びる物語であるのと同時に、彼女たちが依存から自立へと向かう物語でもある。この「自立」という主題は、ウォーリスのライフ・ライティングである『私たちの自立』(*Raising Ourselves*, 2002)の中心的な論題となっている。

『私たちの自立』の舞台は、ウォーリスが育った内陸アラスカのフォート・ユーコン (Fort Yukon) である。この作品は、ウォーリス自身の半生を綴ると同時に、彼女が属していたグウィッチン・コミュニティが西洋文明と接触を経て、荒廃していくさまが編年体の形式で詳細に語られる。作品が射程とする時代は、ウォーリスが祖母や両親から伝え聞いた1900年代初頭から、現在に至るまでの期間である。ウォーリスの人生の前史として語られる、フォート・ユーコンの過去は、西洋文明との接触による伝染病の被害にはじまり、白人入植者から受ける差別的な待遇、キリスト教の布教による伝統的な信仰の喪失などの陰惨な出来事に満ちている。さらに、ウォーリス自身のライフ・ストーリーでは、自身が育ったアルコールが蔓延するフォート・ユーコンの町が前景化される。アルコールへの依存が町を蝕むきっかけになったのは、意外にも冷戦構造下の軍の再編にあった。そもそも、アラスカは第二次大戦当時から、安全保障上の拠点と目されていた。大戦中にアメリカが唯一、日本軍によって占領されたのがアッツ島であったことは、広く知られるところであり、それを受けて軍の物資輸送のためアラスカ・カナダ・ハイウェイが建設された経緯もある。合衆国にとって、冷戦下のアラスカは対ソ連の最前線であり、ミサイル防衛のためのレーダー基地を設置する必要性が高まったことから、1950年にフォート・ユーコンに米軍施設が建設される。軍事施設の建設にともない、本土から軍関係者たちが移り住むことによって、この地域に大量のアルコールが持ち込まれる。

ウォーリスが「1970年代にはフォート・ユーコンの誰もが酒に酔っているようだった。私の世代の誰もが、ルール、規律、秩序といった概念がないままに十代を過ごした。」(148)と述べるように、彼女の幼少期には町全体がアルコールで麻痺した状態になり、さながら無法地帯と化したコミュニティの状況が詳述される。折しもこの時期は、アラスカ先住民土地請求権解決法(1971年)が制定された時期に重なる。プルドーベイでの油田発見(1968年)を契機に、パイプラインを敷設するために土地の権利関係を明確にする必要が生じた。先住民は法律が定める集落に登録され、土地は特定の地域会社の所有という形になり、事実上、遊動生活ができなくなった。この時期から町の人々がアルコールへの依存を強めるにつれて、グウィッチン社会は疲弊し、人々は食料配給券と生活保護に頼らざるを得ない状況に陥る。アルコールや薬物依存、貧困、虐待、犯罪、自殺の増加などの様々な問題がフォート・ユーコンに荒廃した状況をもたらした。

本土の文明との接触によって伝統的な生活形態は失われ、さながら棄てられた民として生きるグウィッチンの人々の自立のために、ウォーリスは「物語」を語り継ぐことの重要性に気づく。

Each year we lose elders who understood the past and spoke our Native language. I fear that our young ones will never know the beauty of life that existed once upon a time, before the coming of drinking and drugs. Then I remind myself that I, too, am a product of alcoholism. I've come to the realization that stories must be preserved for our children so they will not think what they are experiencing in their villages is all that has ever been. (*Raising Ourselves* 210)

ウォーリスが言う「物語」とは、グウィッチンの人々に古くから伝わる民話であると同時に、白人の文明との接触を期に変貌を余儀なくさせられたフォート・ユーコンの歴史でもある。言うまでもなく『ふたりの老女』における姥捨てのモチーフは、『私たちの自立』に描かれる主流社会から棄てられた先住民コミュニティの現在にその似姿をみる。

先住民文学研究者のジェラルド・ヴィゼナー (Gerald Vizenor) は、生き延びること (survival) と抵抗すること (resistance) とを組み合わせた造語「サバイバンス (survivance)」を考案し、「先住民のサバイバンスとは生き延びることや耐え抜くことのような単なる受け身の反応以上のものである」(15) と述べ、先住民のサバイバンスの物語 (narratives of survivance) にドミナントな文化に対する対抗の契機を見出す。さらにジェイムズ・ルパート (James Ruppert) はヴィゼナーの概念を受けて、ウォーリスの作品は「サバイバルとレジスタンスが先住民文学において結びつくことをはっきりと示している」(291) と指摘する。ヴィゼナーとルパートの議論に基づくならば、ウォーリスの作品は、グウィッチンの人々を取り巻くエイジズム、セクシズム、レイシズム、コロニアリズム、開発による環境破壊など、幾層にも重なる問題系に対峙するサバイバンスの物語として位置づけられる。

おわりに

冒頭で述べたように、『ふたりの老女』は世界 17 カ国で翻訳され、新鋭の先住民作家による作品としては異例のミリオンセラーとなった。日本においては、1995 年に翻訳が出版され、2005 年には、福田善之の脚本「二人の老女の伝説」をもとに、劇団文化座によって上演されることとなった。福田の脚本が興味深いのは、「大都会のスラム街」が「姥捨て物語」のフレームとして用いられていることだ。都会の片隅に生きるホームレスの少年たちの前で、アラスカ先住民の少女が「ふたりの老女の話」を語るという枠組みは、ニート、ネットカフェ難民、ワーキングプア、後期高齢者医療制度等の格差問題が山積する現在の日本という解釈共同体ならではの設定であった。サッチャリズムやレーガノミクスを皮切りに、グローバリズムの進展と手を携えた新自由主義路線が各国に拡大していくなかで、その当然の帰結として、あらゆる局面で格差が拡大したことはいまさら言うまでもない。「勝ち組」に対する「負け組み」という言葉に象徴されるように、社会的包摂性を欠いた社会においては、弱者の「切り捨て」が黙認さ

れる状況にある。本論で検討したようにアラスカ先住民の棄老伝説が世界中で広く受け入れられた背景には、文明の発展の陰で周縁化され、切り捨てられてゆく人々の抵抗のモメントを様々な解釈共同体に属する読者が見出したからに他ならない。

引用文献

- Babb, Genie. "Paula Gunn Allen's Grandmothers: toward a Responsive Feminist-Tribal Reading of *Two Old Women*." *American Indian Quarterly*. 21.2 (1998) : 299–331.
- Egan, Timothy. "Old, Ailing and Finally a Burden Abandoned." *The New York Times*, 26 Mar. 1992, National ed., sec. A1.
- Erdman B. Palmore. *Ageism: Negative and Positive, Second Edition*. New York: Springer, 1999.
- 福田善之「戯曲：二人の老女の伝説（文化座上演台本）」『テアトロ』2005年6月号：98–131。
- 井上敏昭「我々はカリブーの民である：アラスカ・カナダ先住民のアイデンティティと開発運動」『北の民の人類学：強国に生きる民族性と帰属性』京都大学学術出版会、2007年、95–117。
- Kollin, Susan. *Nature's State: Imagining Alaska as the Last Frontier*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001.
- McDaniel, Sandi. "'Giving Away' the Legend in Publishing Tribal Tale, Fort Yukon Writer Faces Criticism." *Anchorage Daily News*. 19 Sep. 1993: J1.
- Murray, John. "Rev. of *Two Old Women*, by Velma Wallis." *Washington Post Book World*. 19 Dec. 1993: 2.
- Ramsey, Rachel. "Salvage Ethnography and Gender Politics in *Two Old Women*: Velma Wallis's Retelling of a Gwich'in Oral Story." *Studies in American Indian Literatures*. 11.3 (1999): 21–41.
- Ruppert, James. "Survivance in the Works of Velma Wallis." *Survivance: Narratives of Native Presence*. Ed. Gerald Vizenor. Lincoln: U of Nebraska P, 2008.
- Vizenor, Gerald. *Fugitive Poses: Native American Indian Scenes of Absence and Presence*. Lincoln: U of Nebraska P, 1998.
- Wallis, Velma. *Bird Girl and the Man Who Followed the Sun*. Seattle: Epicenter Press, 1996.
- . *Raising Ourselves: A Gwich'in Coming of Age Story from the Yukon River*. Seattle: Epicenter Press, 2002.
- . *Two Old Women: An Alaskan Legend of Betrayal, Courage and Survival*. Seattle: Epicenter Press, 1993.

Waxman, Barbara Frey. *To Live in the Center of the Moment: Literary Autobiographies of Aging*. Charlottesville: UP of Virginia, 1997.